

## 序

科学研究費補助金（科研費）は一応の目標であった1,000億円を昨年度に達成し、さらに平成9年度には1,122億円（10.2%増）を予算計上としており、予算の伸び率が抑制される中であって、科学技術創造立国を目指すわが国の学術研究の財政的基盤が次々に充実されつつある。また未来開拓推進事業（未来開拓）として昨年度より始めて110億円が計上され、日本学術振興会（学振）が取り扱うことになったが、平成9年度には約2倍の206億円が予算案として計上されている。

一方これとは別に「脳科学時代」プロジェクトが本年度から着手され、脳の働きの解明、脳の病気の解明、脳型コンピューターの開発を戦畧目標の三本柱として20年間の長期計画を立案し、5年毎の具体的目標を設定しつつ計画の遂行を目指している。またこの間の年間平均研究予算は1,000億円（約額2兆円）の予定で、科学技術庁が厚生、農林水産、通産、郵政などの各省庁と共に実施にあたる。すでに米国では1989年に上院で「脳の10年Decade of Brain」が議決され、翌年から計画が開始され、その後ヨーロッパ各国にも同様な動きが波及した。わが国では文部省の重点領域研究班が中心になり、「脳の世紀」という組織的な運動がようやく1993年より始まったが、他の省庁の予算を含めても年間60億円前後（米国、総年間予算約2,000億円）で、96年4月に日本学術会議が脳研究の推進を求める政府勧告を出し、ようやく本年度から上記計画が実行される事になり、欧米に比肩し得る研究基盤が確立され、二十一世紀に向けてのプロジェクトの成果が期待される状況になった。

文部省の科研費のうち、最先端研究の重点的推進として「特別推進研究」および「重点領域研究」の充実が図られているが、後者のひとつにヒト・ゲノム解析計画があり、平成3年度より「創成的基礎研究」、「重点領域研究」領域で研究班が組織され、才Ⅰ期プロジェクトとして昨年までに遺伝地図作成がほぼ完成した。昨年度よりさらに5年間の才Ⅱ期（展開期）プロジェクトが発足し、ヒト・ゲノムの構造解析、機能解析、生物知識情報の3つの計画班が組織され具体的な研究が進められている。ヒト・ゲノム解析計画は前述の脳科学研究、がん・エイズ研究と共に二十一世紀初頭にかけての最重要の生命科学研究課題とみなされ、文部省以外の通産、郵政、厚生各省庁、製薬メーカー等も共同出資して研究所を設立し、積極的に参画しつつある。

本学でもすでに平成7年度に遺伝子実験施設が設置されたが、昨年末に研究棟（約1,500㎡）が完成し、北陸地区随一の施設が完備しており、5月9日に竣工記念行事が開催予定である。昨年もふれた様に、この分野における本学での研究の推進役を担うとともに、施設・設備の共同利用、共同研究、研究会の開催等を通じて、県内でのセンター的施設としての役割をも果たすことを期待したい。

学 長 佐々木 博